

# F-14 母と子の意識のズレからみた漁村の親子関係

お茶の水女大家政 湯沢雅彦 高知大教育 ○鈴木敏子

目的 志摩半島の一漁村安乗で、漁村家族の生活調査を重ねるうち、漁業という生業がもたらしている不規則な家庭生活、出稼ぎによる父親不在家庭等を目にし、漁業後継者問題の実態を知り、親子関係を追求する必要を感じた。そこで、日常の親子のコミュニケーションと子の将来の生活、そしてこれら二者の接点をなす学習に関する点を中心とした意識について、母と子のズレを確かめ、既存の横浜調査と比較しながら、社会経済的諸条件が変動している漁村の、親子関係の問題点を探ろうとした。

方法 調査対象：安乗小学校5年生の児童、安乗中学校2・3年生の生徒とそれぞれの母親 調査方法：上述の内容で、同一項目から構成した児童・生徒用、母親用の調査票を用意し、子には学校で一せいに記入を求め、母親には訪問面接調査をした。調査時期：昭和46年7月5日～8日 分析数：記入不備、父親欠損家族を除き（父親出稼ぎ不在は含む）、母子がペアを形成している100組（有効率76%）。

結果 I. ①24%の父親が出稼中、95%の母親が就労している ②親子共に食事する率が低く、特に朝食を1人でとる子が40%、きょうだいのみとが11%もあった ③母が子と話し合う時間は「なし」の10%を含め、30分以下が62%である。これらの実態から、親子の量的接触は少いものと推察される。II. そのためか、母と子の意識の一致率は横浜調査より10～30%低く、ズレが大きい。しかも、本調査の方が否定的な回答で一致している傾向にある。III. 漁業承継を期待、希望する母子は2、3例にすぎず、かといって、漁業に代わる具体的な将来像や展望を見出しているわけでもない。